能力者伝説 ～仲間探し編～

kaz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
能力者伝説　～仲間探し編～

【Ｎコード】
Ｎ８７４９Ｃ

【作者名】
ｋａｚ

【あらすじ】
中学生たちの日常・・・・それは以外なほどにもろくくずれた。

第一章　始まり

ここはごくありふれた感じの中学校。
男女共同の・・・つまり共学で、男子と女子の人数は半々。
そして、舞台は中学1年生のとあるクラスとなる。

4月　入学式が終わり、学校生活2週間後ぐらいのある日。

大宮　「だる～い。」＞大宮　和弘　　オオミヤ　カズヒロ　　男の子

井ノ原　「クラスの仲間の名前覚えるっていうのにそれはないんじゃない！」
＞井ノ原　清香　　イノハラ　キヨカ　　女の子

小川　「まぁ、35人もいるから覚えられないよね～。」
＞小川　葛妃　　オガワ　カツキ　　男の子
大宮　「クラスの人間の名前なんてそのうち覚えるって。」

小川　「まぁ、だいたいそんな感じだよね～。」

井ノ原　「あのねぇ・・・相変わらずだわ。」

大宮、小川、井ノ原は同じ小学校出身である。

小川　「そういや、今日は宿題あったっけ？」

大宮　「数学だな。まぁ、二次関数とかいう簡単なものさ。」

中1で二次関数をやる結構ハイレベルな学校である。

先生　「こら、そこ。やる気あるのかい？」
大宮　「・・・・は～い。えっと、・・・・」

こういう日常的なものが続くのが本来だが、無論そうはいかない。日常は以外にもあっさり崩れ去ったりした。それはもうかったるくなってくる5時間目。
大宮　「ね、眠い・・・・。」

小川　「ｚｚｚｚ・・・・。」

大宮　「・・・寝てるし。」

そのとき白いなにかが大宮の顔をかすめ、小川の頭にあたった。かなり鈍い音と共に。

小川　「いっ痛ッ！」
先生　「はい、そこ寝ない。」

チョークという名の弾丸が小川の頭にあたったのだった。同時に、大宮の額にも赤いなにかがぶちあたる。

先生　「眠いかい？」
大宮　「・・・い・・・いえ。全然。」

先生が黒板に向き直り、チョークを手にしたとき・・・

ズダダダ！！！

クラス一同　「！！！なんだ！」

大宮　「銃声・・・にしては妙な感じが・・・・・。」

小川　「うん、なんか・・・変な感じ・・・・。」

先生　「落ち着いて、落ち着いて席に座っていなさい。」

音は校庭からだ。気にならない人がいないわけがない。みんな校庭に面していたベランダへとでた。

そこには、なにもなかった・・・・・・・大きな穴以外は。

大宮　「な、なんだあの穴は？」

小川　「知るか～。」

その大きな穴はとても深く、異様なまでに暗かった。

大宮　「・・・・どうやってできたんだよ。あんなの。」

井ノ原　「ねぇねぇ！見に行って見ない？面白そうよ！」

井ノ原が後ろから騒ぎ立てる。

大宮　「・・・・え、なんで急に元気に？」

井ノ原　「面白そうよ！ほら、ねぇ！」

小川　「・・・なんか、こう、緊迫感っていうのかな。それぐらー

ー」

井ノ原　「持ってないわ！」

そのとき、穴が轟音をたてはじめた。

大宮　「な、なんだ？風？」

小川　「吸い込まれちゃいそうだね～。」

井ノ原　「・・・というか、吸い込まれてるわよ。」

学校ごと穴へと吸い込まれていく。

一同　「なんだこれぇぇぇ！！！」

学校は皆もろとも穴へ吸い込まれた。そして、穴が閉じた。

大宮　「う・・・ん・・・いたた。どうなって・・・ん？」

大宮は牢屋の中にいた。

大宮　「だせぇ～～！！！」

そして、物語ははじまる。

第一章　始まり（後書き）

はじめまして。ｋａｚです。こんな駄作ですが、まだ続きもあるので読んでくださると嬉しいです。よろしくお願いします。

第二章

突然現れた穴に学校ごと吸い込まれた大宮たち。
大宮が目覚めてみるとそこは・・・・牢屋だった。

大宮　「えぇっ！？なんで！？なんで牢屋！？なにか悪いこてしたか、俺？」

すると男が牢屋の前に現れた。

大宮　「だせぇ～～！！！」

男　「・・・あなたはなにをやっているのですか？」

大宮　「こっちのセリフだコラ！　出せって。」

男　「あいてますよ。鍵。」

大宮は牢屋の扉を押してみる。ギギギという不快な音と共に扉は開いた。

男　「まず、いかなる場合も冷静に対処しなければ、ここでは生きて行けませんよ。」

大宮　「・・・・・ここ？ここはどこだ？」

男　「あれ？御存じでない？」

大宮　「起きたら牢屋の中だ。しかも今さっき。分かるわけないだ

ろ。」

男　「なるほど。でも、まずはここから脱出しましょう。いつまでもここにいたら危険ですので。」

大宮　「は？」

男　「これを。」

大宮は槍を渡された。

男　「模擬戦はやったことがあるハズです。その感覚で敵の攻撃を止めるだけで十分です。」

大宮　「は？模擬戦・・・・・チャンバラはありかなぁ・・・。」

男　「チャンバラ？」

大宮　「まぁ、頑張ってみます。さぁ、先を急ぐのでは？」

男　「あぁ、そうでした。こっちです。ついてきてください。」

男は走りはじめた。大宮も続く。

男　「まずは自己紹介を。陸遜といいます。陸伯言です。」

大宮　「・・・・見た目からそうだろうと思いましたよ。５で変わりすぎでしたけど、今は４の姿ですね。」

陸遜　「は？」

大宮　「いえ、なんでもありません。自分は大宮　和弘といいます。

以後よろしく。」

陸遜　「大宮殿ですね。まずはこの辺りの説明を－－－」

大宮　「大宮・・と呼び捨てで構いません。」

陸遜　「では、大宮さん・・で。まずこの辺りは・・・私も詳しくは知らないのですが、まず、ここに入ると異能の力をもつ者となるようです。そして、その力はいくつかの系統にわけられ－－－」

兵士Ａ　「む、脱獄者か！止まれ！」

兵士Ｂ　「ちょ、まて。まだ飯－－－」

陸遜　「押しとおります！」

陸遜は赤い刀身をもつ双剣をだし、あっという間に二人を斬り伏せた。

陸遜　「見つかりましたか。急ぎましょう。」

大宮　「無論です。」

二人は長い一直線の廊下を突き進む。すると、前方から多数の兵士が駆け付けた。

陸遜　「全て相手にせず、道を開ける程度で十分です。」

大宮　「了解。」

陸遜がまず、３人斬り伏せた。そのまま次々と兵士を斬る。

するとわきから兵士が斬りかかった。

大宮　「全く。俺は無視かい？」

大宮の槍が兵士の胸を貫く。大宮は槍の矛先を抜き、周囲の兵士を素早く斬り伏せる。

陸遜　「なかなか上手じゃないですか。」

大宮　「今まで、チャンバラなら負けなしです！」

陸遜　「・・・・よく分かりませんが、頼もしいです。」

そして、なんとか廊下をでた。そこは広いホールのような場所だった。

また、そこには当然のように兵士がきれいに整列して待ち構えていた。

陸遜　「・・・・・ありゃりゃ。」

大宮　「ありゃりゃじゃないでしょ。」

そして、兵士が一斉に斬りかかって来た。

第二章（後書き）

第二章が書き終わりました。
これからも、読書の皆様に楽しんでもらえるように頑張っていきますので、応援よろしくお願いします。

第三章

陸遜に牢屋を出させてもらい、共に脱出をはかるも、大勢の兵士にかこまれた大宮。
そして、その兵士たちが一斉に斬りかかって来た。

大宮　「さて、少し頑張りますか。」

陸遜　「えぇ。そうですね。こんなところで死ぬのは御免なので。」

陸遜は紅い刀身をもつ双剣を構え言い放つ。

陸遜　「燃えろ、『閃飛燕』！！」

その掛け声とともに陸遜のもつ双剣の刀身に炎がともり、激しく燃え盛った。

大宮　（・・・・それが、異能の力・・・・・ね。）

陸遜　「えいやっ！」

陸遜が剣を振るうと、炎がほとばしり、敵を焼尽くす。

大宮　「さぁて、俺もやりますか。」

大宮も迫り来る敵を次々と倒して行く。
御存じだと思うが、槍とは本来撲殺型の武器で、相手の兜にあてて頭にダメージを与えるような使い方をする。が、大宮は槍を短くもち、全ての敵兵を斬り捨てて行く。

陸遜　（本来の使い方とは違いますが、たしかにこの人数差と刃を振るえる範囲の狭さの場合、あの使い方が効率的ではありますね。）

大宮　「チィ、さすがに人数差があるか。長くは持ちませんね。」
陸遜　「仕方がありません。もうここの拠点を潰す覚悟でのぞみます。」

そのとき、ホールの壁の一角が粉々に崩れ落ちた。

ヒナギク　「私は桂　ヒナギク！　行くわよ！」

小川　「小川　葛妃だよ。カズヒロ～。生きてる～？」

大宮　「カツキか。って2人だけ！？え、この人数相手に合計４人！？無謀じゃん！！」

小川　「なんて言ってますよ～。ヒナギクさん。」

ヒナギク　「でもやる気なしってわけじゃなそうだし、いいんじゃない？」

小川　「・・・・答えになってませんよ～。」

ヒナギク　「おしゃべりは終わり。目の前の敵と仲間の安全にだけ気を配りなさい。」

小川　「分かってますって～♪」

小川は右手を前に突き出し、

小川　「・・・飛べ、氷の剣。」

小川の右手の前から次々と氷の剣がつくられ、吹っ飛んでいく。

大宮　「・・・・あいつ、なんであんなのできんだよ。」

兵士　「あれぇ、だめだよお嬢ちゃん。こんなところに来たら――」

兵士は突然真っ二つになった。

ヒナギク　「悪いわね。私だって騎士―ナイト―よ。」

兵士達　「う・・・なんだこいつら。だ、ダメだぁ。化け物だぁ～。」

兵士達　「勝てるわけねぇよ。逃げちまえ！」

兵士達は少しずつ逃亡をはじめた。

ヒナギク　「なによ、腰抜けばかりね。ここは。」

陸遜　「好都合です。このまま我々も戻りましょう。」

大宮　「敵の拠点を奪わなくていいのですか？」

ヒナギク　「ここ潰しても、周りは敵だらけよ。」

大宮　「あ、それじゃぁダメですね。」

陸遜　「さぁ、戻りましょう。」

小川　「あいさ～。んじゃ、別れの挨拶を・・・・・氷牢・捕縛陣。」

氷の壁か作り上げられ、その中の兵士を氷付けにしていく。

大宮　「・・・・ありゃぁ。」

そして、４人は拠点を去った。

第四章

小川、ヒナギクの救援もあり、無事に敵拠点を脱した大宮と陸遜。
そして、小川、ヒナギク、陸遜に連れられたどり着いたのは・・・・
なんと、大宮らの属していた中学校の寮だった。

大宮　「えぇっ！　寮じゃん！」

小川　「そうなんだよ。僕も始めは驚いた。」

陸遜　「さて、まずは今の仲間を紹介しますね。今回の脱出を助けてくれた――」

大宮　「カツキとヒナギクさん・・・・。もう覚えたよ。」

陸遜　「早いですね。では残りの5人。左からお願いできますか？」

川原　「川原　健也だ。大宮とは一応クラスメイトだ。」

大宮　（あのスカしたイケメンか。）

星彩　「私は星彩。よろしく。」

三成　「石田　三成だ。」

凌統　「凌公績だ。よろしくな。」

向池　「向池　蛍火です。覚えてますか？」

大宮　「クラスメイト・・・・だったはずだ。」
向池　「正解です♪」
陸遜　「どうやら、もうすでに見知っている方がいたようですね。」
大宮　「さて、いくつか質問がある。まず、能力って・・・・まぁ、見たが、どう使う？」
星彩　「まずは精神力の制御。そして、その精神力を手のひらの上でまわすかんじにする。そのときなにが出るかによって、個人の能力は決まる。自分は何の能力者なのかをまずは自覚する。話はそれからよ。」
陸遜　「精神力の制御はそんな簡単にできるものでは――」
そのとき、部屋の中をどこか暖かな風が吹き始めた。
一同　「え？」
大宮　「なるほど。俺は風使いってわけね。」
小川　「わ～、すごいね。さすがは無敵のカズヒロだ～♪」
大宮　「からかっているようにしか聞こえないんだけど。」
凌統　「おいおい、精神力の制御なんてみんなだいたい5日はできなかったってのに・・・・ケンヤ以来だな。」
川原　「おい、下の名で呼ぶなとあれほど――」
凌統　「どうでもいいじゃないか。そんなことは。」

陸遜　「では、その風の能力をどのように使うか・・・・・です。」

星彩　「結論から言うと、自分で考えなさい。」

大宮　「・・・・・なんか、俺嫌われるようなことしたっけ？君に。」

星彩　「君じゃないわ。星彩よ。」

大宮　「・・・・知ってるよ！」

陸遜　「まぁまぁ、星彩さんの言った通りなんですよ。結論は。これば っかりは、御自分でやっていただかないと・・・私たちでは御助力できません。」

大宮　「そうなんですか。まぁ、頑張ります。」

陸遜　「さて、今日は2人も仲間が増えまし－－－」

大宮　「え！？俺以外にいたんすか？」

陸遜　「ええ。大宮さんを救出するまえに星彩さんが。」

大宮　「ほぅ。随分とまぁなじんでいらっしゃいますが？」

星彩　「ひ、皮肉のつもり？」

大宮　「御名答・・・・・。」

星彩　（こ、こいつ・・・・・。）

小川　「んじゃ、カズヒロと星彩はまず、自由に部屋選んで～。そのあいだに俺は風呂にでも。」

陸遜　「なら、私も一緒に。どうせなにもないですしね。この後。」

凌統　「俺は備え付けのでいいや。」

備え付けの風呂がついてる結構すごい寮である。

大宮は自分が住んでいた部屋に入った。

大宮　「私物はなし・・・・鍵は置いてあるな。便利なこった。・・・・・・・・練習は深夜でいいか。寝よ。」

しばらくたって。

大宮　「ん・・・・随分寝たかな？つか、寝苦しいな。なんだ？」

大宮は体を起こし、ベッド真上の小さなライトをつけた。

女が寝ていた。

大宮　「・・・・・だれ？」

第五章

部屋で寝ていたら、なぜか、いつの間にか女性がのっかって寝ていた。
そんなサプライズにかなり驚いた大宮。
じつは、この女性は・・・・・・・・

大宮　「・・・・・・・・・誰？」

しかし、女は起きない。

大宮　「・・・・ふぅ。起きろっ！」

女　「ぎゃふっ！」

大宮は思い切り腹にチョップをくらわせた。
女　「げ、げほっ！ゴホッ！な・・・・なに？」
大宮　「それはこっちのセリフだ。お前は誰だ。」

女　「・・・・。え？私？私は・・・・・・・誰だっけ？」

大宮　「知るか。俺に聞くな。」

女　「菊奈？私・・・・菊奈？」

大宮　「殴るぞ。いい加減に悪ふざけはよせ。まず、お前は誰だ？」

女　「さぁ？知らない。」

大宮は足を跳ねあげた。その反動で女はベッドからずり落ち、頭を床にぶつけた。

女　「い、いたぁ～い！」

大宮　「思い出したか？」

女　「ひっど～い！ごめんの一言もなし？」

大宮　「勝手に人の部屋に入って、しかも人の上で寝ていてすみませんの一言もなしか？」

女　「え？私・・・あなたと一緒に寝てたの？」

大宮　「超一方的にな。」

超を強調する大宮。

女　「名前は自分でも分かりません。そしてふつつか者ですがよろしくお願いします。」

大宮　「・・・・・・よし、蹴る。」

大宮は思い切り女を蹴り飛ばした。

大宮　「で？なんて言いました？」

女　「ふつつか者ですが・・・よろしくお願いします。」

大宮　「さて、死にたいとみた。」

女　「ふぇぇぇ！？ひどい！」

大宮　「怪しいね。とりあえず、皆を集めるか。」

―しばらくして。

寮のホールに皆が集まっていた。

陸遜　「お幸せに。」

凌統　「全く、すみにおけない男だっつの。」

小川　「にしても、さっそく寝るなんて・・・・早すぎない？」

大宮　「・・・・よ～く分かった。」

―１０分後

女　「だ、大丈夫ですか？」

陸遜　「えぇ、なんとか。」

小川　「相変わらずつっこみが激しいなぁ。」

凌統　「大丈夫ではないので、あなたと愛とその胸で治して――」

大宮　「死ねぃっ！」

凌統　「ガフっ！」

凌統は吹っ飛んで行った。

小川　「・・・・・うん。今のはないよ。」

女　「・・・私そんなに胸ある？」

大宮　「知るか。」

陸遜　「しかし、正直に記憶喪失・・・・ですか。刺客にしてはやはり違和感がありますね。」

大宮　「なら、陸遜を信じるよ。吉とでるか凶とでるか・・・・」

女　「つまり？」

大宮　「つまり、仲間に迎えるってことだね。」

小川　「でも、名前がないとねぇ。」

女　「菊でいいわ。」

大宮　「う～ん、ヒナギクさんと若干かぶるなぁ。」

女　「じゃあ・・・・・・なんだろ？でも花がいいな。あなたが決めて。」

女は大宮を指さした。

一同　（こいつ・・・・・モテる・・・・・。）

大宮　「え！？俺？ん～と・・・・・・えと・・・・んじゃ、菫。」

女　「・・・・・んじゃ、私は、菫。よろしくね。」

こうして、新たに菫が仲間に入った。

第六章

菫が加わり、合計9人となった大宮たち。
そして、今、大宮たちは危機に直面したりする。

小川　「スミレさんよろしく～。」

菫　「うん。よろしくね。」

凌統　「さて、こんな時になんだけどさ、たった今速報が入ったよ。」

大宮　「ん？速報？」

凌統　「今さっき、敵の攻撃でお隣りの部署が陥落。」

陸遜　「隣りといえば・・・・たしか能力者１２人でしたね。たしか、麒麟児と言われたキョウ維殿がいたはずですが・・・・。」

凌統　「その麒麟児さんはそのうちこっち来るよ。１２人全員生き残ってる・・・・が、３人が今は戦えない状態だそうだ。」

大宮　「人数はこちらより上だったのか。だいたいの戦闘力はどんなだったんだ？」

陸遜　「まず、そう簡単には負けませんよ。さらに、あそこはもはや城でしたよ。」

凌統　「オレもみたことあるが・・・・敵さんが5万ぐらいなら、返り討ちにできそうな感じだった。あそこの姉ちゃんもなかなか強

かったしな。なんて言ったっけな？」

陸遜　「井ノ原さんですよ。」

小川　「あいつかぁ・・・・・・元気そうで何よりだぁ。」

星彩　「知ってるの？」

川原　「俺たちとはクラスメイトだ。」

ヒナギク　「そうなの・・・・そういえば、私と一緒に落とされたハヤテ君たちは大丈夫かしら？」

大宮　「・・・・とりあえず、こっちに向かってる１２人は早急に救出した方がよさそうですね。」

大宮　「自分が行きますよ。」

陸遜　「ダメです。まだあなたは・・・言っても無駄みたいですね。星彩さんと凌統殿もついて行ってあげてください。」

星彩　「分かったわ。」

凌統　「まかしとけっつの。」

菫　「あの、私も・・・」

陸遜　「・・・・・分かりました。では、４人で行ってください。」

大宮　「敵に遭遇しても、味方の救出が最重要・・・・でも負傷者がいるのか・・・・自分が囮をぶふぅっ！」

大宮は蹴り飛ばされた。
大宮　「自分が行きますよ。」
陸遜　「ダメです。まだあなたは・・・言っても無駄みたいですね。星彩さんと凌統殿もついて行ってあげてください。」
星彩　「分かったわ。」
凌統　「まかしとけっつの。」
菫　「あの、私も・・・」
陸遜　「・・・・・分かりました。では、４人で行ってください。」
大宮　「敵に遭遇しても、味方の救出が最重要・・・・でも負傷者がいるのか・・・・自分が囮をぶふぅっ！」
大宮は蹴り飛ばされた。
星彩　「あなたはまだ未熟。それに、囮なんていらない。」
―そして。
大宮たちは寮からしばらく走っていき、１２人にはち合わせた。
が、戦闘中であった。敵はたった２人。
そして、１２人いた人数は、闘える者は４人となっていた。
大宮　「井ノ原ぁ！」
井ノ原　「へ？大宮？何しに来たのよ？」

凌統　「救援ってやつさ。」

キョウ維　「あ、凌統殿。ということは、陸遜殿ですね。」

星彩　「久しぶりね。陸遜の勧めもあるけど、この人が言い出したことよ。」

井ノ原　「え！？大宮が？へぇ、随分丸くなったわねぇ。」

敵の男　「よそ見している暇はないぞ。」

井ノ原の懐深くに潜り込んだが、

凌統　「調子にのんなっつの！」

凌統が瞬間的に蹴り飛ばした。

敵の男は空中で体制を整え、反撃に転じる。

井ノ原　「さっきとは違うわよ。」

井ノ原は真っ赤な弓の弦を引き絞り、同じく真っ赤な矢を放った。

それは緩やかな曲線を描き、敵の男に襲いかかる。

敵の男　「またそれか。」

男はその矢から異常なまでに距離をとる。

それは、その矢の破壊力が原因だった。

井ノ原の放った矢は地面に辺り、周囲１０ｍを吹き飛ばした。

大宮　「・・・・うぉう。」

大宮、菫、星彩はただ驚いていた。

第七章

大宮、凌統、星彩、菫は危機にある味方を助けにいったが・・・・

井ノ原　「全く、逃げ足だけは速いわね！」

男　「それは褒め言葉として受け取っておこう。」

井ノ原は首をつかまれた。

男　「終いだな。切り刻んでやるよ。」

凌統　「くそっ！間に合え！」

キョウ維　「い、井ノ原さん！！　おっと！」

女　「逃げられないんだな。」

女はキョウ維を蔓でがんじからめにした。

菫　「あなたの相手は私もよ。」

女　「なによあんた？」

菫　「菫。覚えておきなよ。」

女　「スミレぇ？なによ。私と同じじゃない。私は澄嶺よ。」

菫　「そうなんだ。でも、関係ないんだよね。咲け、『紫陽花』。」

鮮やかな紫色の小刀が菫の右手に現れた。

澄嶺　「『捕甲』［トリカブト］の錆にしてあげる！」

澄嶺は濁った緑色の刀をだす。

大宮　「俺は井ノ原の方に行く。星彩さんはあっちの男の子に。」

大宮が指差した先にはオドオドしている男の子がいた。

星彩　「そうね。じゃあ、そっちは任せる。」

大宮　「死なないように頑張りますよ。」

星彩は男の子のもとに駆け付けた。

星彩　「大丈夫？」

男の子　「は、ハイ。なんとか。僕は卓っていいます。よろしくお願いします。」

星彩　「・・・・星彩よ。とりあえず、傷付いた仲間の救出に専念する。いくわよ。」

卓　「ハイ！」

男　「ハイ、やっと一人片付いた。」

井ノ原は凌統のはたらきもあり、死にはしなかったがもう戦える状態じゃなかった。

凌統　「井ノ原をここから非難させてくれ。あいつは俺が止めておく。」

男　「そんな簡単にはやられんよ。」

凌統　「あんたとは一回戦ってみたかったんだよね。緑眼の槍使い。」

男　「知っていたか。まぁ、その名は昔に捨てたがな。中羽　政治・・・・行くぞ。」

大宮　「井ノ原！大丈夫か？」

井ノ原　「・・・・・な、なんとか・・・・・・。」

大宮は井ノ原を支えながら歩き始めた。

卓　「井ノ原さん！・・・・全くあなたは無茶すぎです。あとは僕に任せてください。」

大宮　「あ、あぁ。任せた。」

大宮は中羽と戦う凌統のもとに戻った。

中羽　「お前・・・・まだ能力者成り立てだな。ここで果てたくないなら戻れ。」

大宮　「さぁて、途中退場は嫌いなんだよね。大宮　和弘、いきますか。」

中羽　「馬鹿が！」

中羽は大宮の真後ろに周り込み、殴りかかったが、逆に蹴り返された。

大宮　「見えるんだよね。」

凌統　（成長が早い。こりゃ大物だ。）

中羽　「まだ、瞬動はできないだろうに。」

中羽は瞬間的に大宮の右後ろに現れた。

大宮　「瞬動っていうんだ。精神力を足裏にため、一気に放出して跳ぶ．．．．案外簡単だね。」

大宮は中羽の両手をおさえた。

中羽　「いつの間に．．．．気配がなかったぞ。」

大宮　「俺は存在感消すのも得意だよ。」

中羽は大宮の放った風に両腕を残して吹っ飛んだ。

中羽　「グアアァッ！馬鹿な、なぜ！？」

大宮　「風の能力って多分こう使う方がいいね。」

大宮は腕をふった。その軌道上から風の刃が飛ぶ。それは中羽を真っ二つにした。

大宮　「思ったとおりだ。技の名前は『月光花』がいいかな？」

凌統　「・・・・あっという間にここまで、すごすぎるね。」

ちょうどそのころ。

澄嶺　「ぐあ！？」

董　「下だよ。」

董は下から小刀『紫陽花』を振る。澄嶺の体を深く斬った。

澄嶺　「ち、ちぃ。逃げるか。」

澄嶺は去って行った。

董　「一丁上がり！」

董は右でピースをつくり、左手を腰にあてた。ウィンクは欠かさない。

大宮　「・・・救出完了。」

そして、12人を寮に連れ帰った。がその後、傷がもとで8人は息を引き取った。

第七章（後書き）

主人公大宮君・・・・強すぎ感がありますね。
さて、キャラが一気に増えていきますが、読者の皆様はついていけてますか？「ついていけねーよ！」という方は、できれば頑張って覚えてくださると助かります。
これからも頑張ります。

第八章

新たに４人の仲間が加わった大宮たち。

キョウ維　「助けていただきありがとうございました。」

井ノ原　「にしても、たった二人に８人も殺られるなんてね・・・・・・・」

卓　「あ、皆集まってましたか。」

卓が階段を降りて来た。ここは寮のエントランスホール的な場所である。

陸遜　「彼女の容体はどうですか？」

卓　「一応命はたもちました。けど、意識不明状態です。」

井ノ原　「よかった。」

向池　「こんな時になんですが、また敵ですよ。」

向池が部屋に入って来た。手にはメモがある

陸遜　「早いですね。」

凌統　「早すぎるっつの。」

向池　「えっと、今現在はここから南南東５００ｋｍに陣を展開、数は一万です。」

大宮　「一万・・・・多いで――」

井ノ原　「少ないわね。しかも敵が遠い。明日出発しても中花街でぶつかるわ。」

大宮　「中華街？あの横浜の？」

井ノ原　「中花街。花よ。まぁ、私は見たことないけど。」

陸遜　「地形は碁盤の目のようになっています。建物も真四角なものが多く、材質は全て木材と石からなります。」

キョウ維　「まともに正面からぶつかると分が悪いですね。ここはなにか策を、陸遜殿、あとであなたの部屋にお伺いします。」

大宮　「自分もご一緒していいですか。」

川原　「俺も一緒しよう。」

陸遜　「分かりました。ではあとで。」

凌統　「にしても、一万か・・・・・。」

星彩　「たしかに、能力者の人数に対して兵士は若干少ない。ということは・・・」

凌統　「能力者の方が直々に軍を率いて来るな。」

董　「またあいつと戦うことになりそうね。」

小川　「僕はそういうのあまり気にしないけどな～。」

大宮　「・・・・・だろうな。」

向池　「私は少し調査してきます。」

卓　「あ、自分も行きます。」

向池　「では、行って来ます。」

向池と卓は部屋を出た。

しばらくして、陸遜の部屋。

川原　「見事なまでに碁盤の目だな。地図で碁がうてそうだ。」

キョウ維　「あまり複雑ではありません。高低でいくとこちら側が若干低いです。そして側には大きな川が流れています。」

陸遜　「十中八九水計ですね。」

大宮　「ちょっと待ってくれ、こちらは軍じゃないだろう。」

陸遜　「たしかに、軍ではありませんが。水計を行うとなにがどうなりますか？」

大宮　「水浸しになるだろうな。」

川原　「つまり、相手は水系統の能力者だ。」

大宮　「わざわざ水を呼ばなくても、資源はくさる程あるってことね。」

川原　「ところで、さっきまでの敬語はどうした？」

大宮　「あぁ、考え事すると癖でな。無礼講になるんだ。」

陸遜　「まず、水計は避けられません。つまり、どう対処するかです。」

大宮　「水の流れてるところを多少なりといじくってみるか。」

キョウ維　「どういうことですか？」

大宮　「水の勢いはなにも必ず害ってことじゃないだろう？」

川原　「・・・・水の流れを相手に返すなんて馬鹿な考えではないだろうな？」

陸遜　「いえ、おそらく大宮さんが言いたいのは水浸しになったら逆にそれを利用すればいいと言いたいのでしょう。」

川原　「まさか・・・あまりにも単純すぎる。」

キョウ維　「ですが、確実に相手の出足をくじけます。」

陸遜　「あとでたのんでおきます。」

そして次の日。

中花街にて。

大宮　「さて、一人の脱落も許されませんよ。必ず生きて帰りましょう。」

そして、敵方が動き出した。

第九章　異界歴元年　中花街の戦い

中花街で敵一万と対峙することとなった大宮たち。

中花街は碁盤の目のようになっている一辺２ｋｍの正方形のような地形をもち、大宮たちがいる方が敵方の海抜よりも２ｍ低い。さらに近く（中花街の端から１５０ｍ地点）に大きな川が流れており、その支流（川幅１０ｍ）が中花街を貫いている。建物はすべて木と石による造りとなり、区画内では建物同士はほぼ密着状態。建物の高さはさほど変わりない。

大宮たちは北側。敵側は南に位置し、今日は南に向かって風速２ｍの風が吹いている。

大宮　「・・・・さて、敵が動き出しましたよ。」

陸遜　「では、各部隊に与えられた役割をこなしながら、気おつけて進んでください。」

皆は無線から伝わる陸遜の声に、マイクで応答する。

一同　「了解！」

敵はすでに２０ｍほど進軍していた。

川原　「よし、まずは敵の足止めだ。先方に能力者はいない。思い切り暴れるぞ。」

凌統　「了解！」

董　「わかったわ！」

井ノ原　「当たり前よ！」

向池　「わかりました。」

この中花街は縦の道に関してはかなり広めの道が5本あるのが主であった。つまり、一つの道に一人つくのである。

戦闘はちょうど中間あたりで始まった。

川原　「斬り裂け・・・・『鉄扇　―斬り裂き―』」

川原の右手に青い扇が現れ、川原はそれを開き、一扇ぎした。
たちまち突風が吹き、それに巻き込まれた敵兵は皆斬り刻まれていった。

井ノ原　「私も行かなくちゃあね！」

井ノ原は手を前に突出し、言った。

井ノ原　「弾け！『鳳仙花』！」

根元から二つに枝分かれしている赤い刀。『鳳仙花』は井ノ原の右手にあらわれ、井ノ原が掴むやいなや火の粉を巻き上げた。

井ノ原　「それっ！」

刀をふると、火の粉が飛んで行った。

井ノ原　「弾けろっ！」

大爆発がおき、敵の先方が一気に吹き飛んだ。

向池　「派手にやっていますね。私には真似できそうにありません。照らせ、『月の満ち欠け』」

向池の手元に色のない細い棒がでてきた。

向池　「まずは『新月状態』で出方をみます。

向池は敵を確実に仕留めていった。

菫も同じように敵を仕留めていき、凌統も勢いのある攻撃で敵を倒していった。

大宮　「星彩、陸遜、キョウ維隊も準備を！」

星彩　「分かった。行くわよ。」

陸遜　「前線が変わらぬうちに済ませましょう。」

キョウ維　「了解です。」

３人は前線やや後ろで各作業を始めた。

開戦１時間後。

前線は少しずつ押されていた。

凌統　「ま、まだかっつの。」

井ノ原　「つかれたわよ！」

その時、通信が入った。

大宮　「準備がととのいました。すぐにもどってください。」

川原　「やっとか、退くぞ！」

５人は即座に前線を離れた。

敵　「む、逃げたぞ！」

敵　「やっと疲れがまわったな。」

敵兵長　「よし、各部隊、前進だ。このままおわらせろ！能力者といえど不死身にあらず～！」

敵は皆突撃を開始した。

そして、先方１００人あたりが陸遜たちを横切った。

陸遜　「今です！」

陸遜の掛け声と友に火の手があがった。火は風にあおられ、すぐさま南側にまで燃え広がった。

大宮　「よし、自分と小川と突撃隊をのこして、残りは前線維持を！」

戦局は逆転した。

第十章

大宮らは火計により、形勢を逆転させた。

大宮　「さて、あとは辛抱だな。」

小川　「う～ん、僕も闘いたいなぁ。」

川原　「無茶を言うな。」

井ノ原　「案外疲れるわよ。」

向池　「私はもう少しイケました。」

凌統　「俺もだ。」

董　「なに強がってんの？」

大宮　「とにかく、陸遜たちに任せるしかないよ。今は。」

―前線

陸遜　「敵の勢いは衰えました。前線を少し押し上げましょう。」

キョウ維　「分りました！」

大宮　「ん？　前線が少し押し上がったな。どうしようか？」

川原　「そうだな。一応俺たちも出た方がいいと思うが。」

小川　「にしても、水計しかけてこないね。」

大宮　「まぁ、いいや。小川はなにかのときすぐ対処できるようにす――」

男の子　「それはこういう事態のことかな？」

大宮　「な！？　後ろに・・・」

男の子　「井ノ原　慶っていうんだ。よろしく。」

小川　「あれ？君は・・・・まぁ、今はそんなこと言ってらんないね。」

川原　「さて、一人で来るというならそこそこ腕があるんだろうな。」

慶　「大丈夫。すぐ終わるよ。」

そう言って慶は笛を吹いて。と、同時に大宮たちのいるあたりに地割れがはしった。

そして、その地割れから次々と兵士？がでてきた。

大宮　「なんだあいつら！？首がない・・・・つぅか黒い！？」

川原　「バカか！？よく見ろ！人なわけねぇだろ！人形かなにかだ！」

慶　「まぁまぁだね。んじゃ、準備もととのったし、行くよ！」

地割れの中から一斉に飛び上がった兵士たちは大宮達に襲いかかる。

大宮　「カツキは前に！ここは俺たちが押さえる。」

大宮は素早い動きで兵士を次々と斬り伏せた。

小川　「了解～♪任せたよ。」

川原　「菫も前だ。あの脳天気を守ってやれ。」

菫　「まかせて！」

―前線

陸遜　「な！？後方に敵？」

キョウ維　「今大宮殿から連絡がありました。心配は無用だそうです。」

星彩　「なら大丈夫ね。私たちは私たちの仕事に専念する。」

―後方

大宮　「なんだ。そこまでたいしたことは・・・・」

凌統　「油断禁物だっつの。数が多い。」

川原　「その通りだ。俺たちはこいつら押さえるのが今の役割だ。」

大宮　「まぁな。」

そして、そこから少し離れたところ。

井ノ原　「コラー！！待ちなさーい！！！」

慶　「うわわわわ、なんでこんな所にねぇちゃんが！！？」

井ノ原　「待ちなさいって言ってるでしょ～！！」

井ノ原は炎弾を乱発した。

それらは慶のギリギリをかすめていく。

慶　「あちちちちっ！」

そのときに、慶の足に炎弾が当たった。

慶　「あつっ！つか痛いっ！」

井ノ原　「もらった。束縛陣・炎ーーー」

そのときに、井ノ原は後ろからなにかにつかまれ、金縛りになった。

慶　「かかったね。ただ逃げてるだけなわけないじゃん。」

井ノ原は心臓を兵士の針状に変化した腕により貫かれた。

と同時に、爆発した。

慶　「ガッ・・・・ハ・・・・」

慶は爆風に巻き込まれ、吹っ飛んだ。

そしてそこには・・・

大宮　「いらっしゃい。」

大宮たちがいた。

第十一章

大宮達と敵勢力との戦闘はあと少しで1時間となっていた。

慶　「・・・そんな・・・あの人形達を全員倒したのかよ・・・５００体はいたのに・・・・。」

川原　「ふん。楽勝だ。」

大宮　「さて、井ノ原の弟さんだよね。降ってくれないかなぁ。」

慶　「バカ言え。んなこと・・・できるかぁ！」

慶の周囲からさっきの泥人形のの１０倍はある大きさの岩石の巨人が5体現われた。

大宮　「マジ！？なんだこいつら？」

井ノ原　「叩き潰せばいいんじゃない？」

川原　「簡単に言うな。大きさだけならさっきのとは桁違いだ。」

凌統　「いや、案外いい線いってると思うぞ。まぁ、叩き潰すのはあの操り人形の奏者だけどね。」

大宮　「まぁ、あのデカブツは俺らがなんとかするよ。井ノ原はあいつよろしく。」

井ノ原　「了解！」

慶　「俺のゴーレムはそんなに弱くは－－－」

そのときに、一体の巨人はバラバラに斬り刻まれて、崩れ去った。
川原　「なんだお前一人で大丈夫そうだな。」
大宮　「無茶言うなよ。まだ初心者だ。」
慶　「そんな・・・俺のゴーレムが、あんなにもあっさり・・・。」
井ノ原　「ちょっと手荒に捕まえるしかないわね。」
慶の目の前を一直線に炎が走る。
慶　「あぁ、分が悪いな。撤退！」
慶は自分の周りを土の壁で囲んだ。
凌統　「逃すかっつの！」
凌統がその壁を蹴り砕いたが、そのころにはもう慶はいなかった。
―敵勢力内
慶　「ぷはっ！」
慶は土のなかからでてきた。
澄嶺　「ごくろぉーさま。あいつらよく止めててくれたね。」
慶　「全く。あなたも人使いが悪い。案外強かったですよ。特に大宮という奴がなかなか面白かったですよ。」
澄嶺　「そう。初心者にしてあの槍つかい倒してるからねぇ。」

慶　「まぁ、あっちは伏線・・・・ですがね。」
澄嶺　「おや、でもさすがに一般隊よりかは強かったよ。」
慶　「でも、弱かったですけど。まぁ、あいつもここからが本領発揮なんですけどね。」
澄嶺　「さて、作戦開始ね。」

中花街を貫くようにはしっている川の様子が一変した。
水は溢れ出し、一気に大宮たちのいるところへと押し寄せた。
大宮　「きたみたいだな。」
大宮は無線を皆に繋げる。
無線から応答がくる。
陸遜　「では、小川さんは予定通りに。」
井ノ原　「しくじらないでよ！」
小川　「了解～♪」
小川は建物の屋上にとび、両手をまえに突出す。
小川　「む～・・・・絶対零度！！」
青白く輝く風が押し寄せる水に浴びせられる。
水は一瞬にして凍った。さらに風はふき続ける。
建物や道路、敵の兵士でされも凍り付けとなった。

澄嶺　「・・・・へぇ、氷の能力者いたんだ。」
慶　「まぁ、あんなことしたら水は使いにくいですが・・・・問題なし。」
澄嶺　「暴れてきなさい。あのぐらいの人数なら、一人で行けるでしょ。」
男　「随分の過大評価ですね。懐しい面々もいますし、時間はかかるかと。」
澄嶺　「生かす必要はない。全員・・・・殺れ。」
男　「この高本　大和。了解した。」
―前線。
陸遜　「辺り一面氷ですね。すごい威力だ。」
星彩　「この機に乗じて前進を――」
高本　「残念ながら。それはできなかったり・・・・」
キョウ維　「能力者！　大宮殿、現れました。」
無線から応答がかえる。
大宮　「よし、全員前進。まずはその能力者を叩きます！」
このとき、敵が高本であることを大宮はまだ知るよしもない。

第十一章（後書き）

さて、十一章まで終わりました。

僕もそろそろ慣れて来たような気がするのですが・・・・。

できれば感想を御聞かせください。

第十二章

中花街での戦いはそろそろ2時間たつところである。
大宮達には（主に前線の方々）疲労が見え始めていた。

高本　「・・・・まずは、あんたらか。」

星彩　「その言葉。そっくりあなたに返す。」

陸遜　「あなたを倒し、今後の戦いを有利にします！」

キョウ維　「いざ、我等の武をもって！」

高本　「おいで、大宮が来るまで遊んであげよう。」

―大宮たちは前線へ向かっていた。

大宮　「にしても、敵は一人だけで来ているようだが、なんで一人なんだ?さっきのだって一人だろ?」

川原　「さぁな。それだけ自信があるんだろう。」

井ノ原　「慶のやつ・・・・・・とっちめなくちゃ。」

小川　「ただいま～。」

小川は横から走って来て、加わった。

大宮　「ごくろうさん。」

大宮　「そろそろ前線だ。卓君と堇はやや後方で待機。それ以外は一点突破だ！」

一同　「了解！」

大宮たちは陸遜等のいる前線へたどりついた。

高本　「おぉ、大宮・・・・・待ちわびたぞ。」

大宮　「・・・・高本か。」

凌統　「あれ？御知り合いかい？」

小川　「ん、ライバルみたいなもんだよ。一方的だけど。」

高本　「さて、そろそろお前を超えさせてもらうとするよ。大宮。」

大宮　「・・・いや、ここは勝っておかないと。」

高本　「剣ももてない初心者がなに言ってんだか・・・・マジックトランプ！」

高本の右手にトランプがでてきた。

大宮　「あぁ、剣ね。もってるよ。まだ一本だけど・・・・白鷺！」

大宮の右手に柄も鍔も刀身も真っ白い、輝く純白につつまれた刀がでてきた。

高本　「面白い。行くぞ。」

大宮　「皆手だすなよ。俺が仕留める！」

高本は道をとなりへ走り始めた。それと平行に大宮も走り、去ってしまった。

小川　「んじゃ、僕たちだけで進みますか～。」

凌統　「よし、一丁行きますか！」

澄嶺　「どこへかしら？」

慶　「まぁ、うちの大将のところでしょ。」

澄嶺　「だとしたら、なんて無謀な・・・・。」

井ノ原　「あ！慶！性懲りもなく・・・・。」

慶　「ねぇちゃん。次は――」

慶　「本気で殺ってあげるよ。」

井ノ原の後ろをとり、喉元に手先をあてた。

井ノ原　「っ・・・・　舐めてくれるわね！」

井ノ原は即座に離れ、瞬時に慶に向き直り、火炎弾を放つ。

慶　「遅いよ。」

慶にあたる寸前、土盛がり上がり火炎弾をすべて消し止めた。

凌統　「速いねぇ。なら、俺と勝負してみないかい？」
凌統は音もなく、慶の後ろに立つ。
慶　「まとめて相手してあげるよ！」
慶は土の巨人を2体作り出した。
澄嶺　「あら、慶は本気みたい。ならこっちはどうする？」
星彩　「あなたは本気をださなくてもいい。結果は変わらない。」
小川　「そうだね～。」
澄嶺　「随分となめて．．．．」
小川が氷の剣で斬りかかる。
澄嶺　「くれますわねっ！」
澄嶺はそれを避けて、針を数本投げた。
小川　「危ないなぁ。」
小川はすべて空中でよけきった。
澄嶺　「避けましたわね？」
針からは目ではとらえにくい糸がはっていた。
小川はそれに絡まった。

小川　「あ、やばい？」

澄嶺　「まず一人！」

糸は小川の体をバラバラに引き裂いた。

はずが、引き裂いたのは氷だった。

澄嶺　「分身！？小癪な！」

澄嶺は糸を切り離そうとするが、凍っているためきれない。

星彩　「もらった。」

星彩が剣を振りかざす。

澄嶺　「っもう！」

澄嶺は口から紫色の霧を吐き出した。

星彩　（何！？）

澄嶺　「毒の能力者って・・・いるのよ。」

星彩　「毒！？しまった！」

星彩は急いで霧から抜ける。しかし足がぐらつき、転んだ。

小川　「お、ピーンチ！」

小川が急いでかけつけようとした、瞬間。
背後から斬られた。

小川　「え・・・・？」

澄嶺　「今度は、御本人かしら？」

小川　「・・・マジかって！」

小川は簡易な回復の術を使い、止血だけは済ませた。

澄嶺　「作業が速いのね。」

小川　「・・・ったくもう。本気・・・・だすしかないじゃん！」

小川の髪の毛と瞳が青く染まって行く。
そして、一本の青い刀身の刀をだした。

小川　「僕の剣だよ。『白虎氷牙』・・・・っていうんだ。」

小川の足元は凍り付いていた。

第十三章

大宮と高本との一騎打ちは小川たちがいるところからは結構離れた交差点にて始まった。

大宮　「にしても、毎回お前はつっかっかってくるね。」

高本　「お互い勝負は負けなし。つまり今まで全部が引き分けだ。ライバルとの戦いに終りはない！」

高本はトランプを一枚なげた。それは黒い槍となり、大宮を襲う。

大宮　「話が長いんだよっ！」

大宮は右手にもつ純白の刀『白鷺』を振り、これをはたき落とす。

高本　「なら、これは？」

また一枚トランプをなげた。が、今度は黒い槍が2本である。

大宮　（カードの数字で本数が違う・・・・のかな？）

そんな推測をたてながら大宮は軽々これをよける。

高本　（・・・にしても、時間をかせげとは、全く、主はなにを考えてるのか。・・・・まさか、俺たちは只の・・・・まぁ、今はそれどころじゃないな。）

高本はスペードの1をなげた。

それは黒い一本の槍となり、大宮めがけとんでいった。

―そのころ。

寮内。最上階のガラス張りのカフェ。

三成　「なんだ。久々の出番か？」

ヒナギク　「あの、唐突になにを？」

三成　「いや、そう言わなければいけない気がしてな。」

ヒナギク　「・・・・。大丈夫ですか。主に頭。」

三成　「・・・・どうだろうな。にしても暇だな。まさか本陣に入り念のための防戦準備とは。まぁ、前線で疲れるよりはマシか。」

ヒナギク　「もぅ、そんなこと言ってないで防御結界はる準備手伝ってください。」

三成　「悪いな。そっちは専門じゃない。それに、もう八割方出来上がってるんだろ？」

ヒナギク　「だから・・・・・・・？」

三成　「ん？どうした？」

ヒナギク　「いや、遠くになにか見えるなぁって・・・・・。」

三成　「気のせいだろ。」

ヒナギク　「・・・そこの双眼鏡とってください。」

三成　「？これか？」

三成は顕微鏡をわたした。

ヒナギク　「・・・・・・バカにしてます？」

三成　「さぁな。」

ヒナギクは三成が手で遊んでいる（？）双眼鏡をぶんどった。

ヒナギク　「・・・・三成さん、戦闘準備を。数は約２０００です。先頭に、中羽。あの緑眼の槍使いですね。」

三成　「そんなことは分かってる。とゆうより、既に準備はできてる。」

ヒナギク　「は？」

敵の軍勢が寮まで１ｋｍをきった。

そのとたん、土の中から大量に液体が噴出した。そして、火がつき、大炎上した。

ヒナギク　「いつの間に・・・・。」

三成　「よし、そこの糸を引いてくれ。」

ヒナギク　「これ？」

ヒナギクは糸をひいた。すると、こんどは土のなかから連弩が大量にあらわれ、一斉発射された。

ヒナギク　「えぇぇ！？」

三成　「さて、うって出るぞ。」

ヒナギク　「大仕事ですね。」

二人は堂々と真正面から向かっていった。

―そのころ。

小川　「行くよ。」

澄嶺　（突然感じが変わった。なんなの、この押しつけられる感覚は？）

小川の姿が消えた。

澄嶺　「どこにいっ――――」

澄嶺の体は宙に吹っ飛んでいた。

澄嶺　「な、なに！？」

澄嶺はそのまま地面に着地、両肩が落ちた。あっけなく、落ちた瞬間は気付けなかった。いつの間に斬られたのかも分からない。

澄嶺　「え、うそ・・・。」

小川　「次は首、行くよ。」

小川は澄嶺の目の前で微笑んでいた。

青き目はどこまでも冷たい色だった。

第十三章（後書き）

小川が強すぎな感じとなりました。
というよりみんな強すぎですね。（笑）

第十四章　中花街の戦い　終結

中花街での戦いは囮だった。が、それを予想した陸遜、キョウ維、大宮により寮周辺にしかけられた罠により、敵の奇襲はほぼ失敗におわった。
そして中花街の戦いにもそろそろ終わりの時が近付いていた。

澄嶺　「あ、あなたは一体・・・・」

小川　「さぁ？誰だろう。」

小川は言い終えると一瞬で澄嶺の後ろに移動していた。

澄嶺　「・・・・そん・・・な・・・・。」

澄嶺の首からまず血が一筋垂れた。そして、頭が落ちた。

小川　「やすらかな眠りを・・・・・。」

一方、慶を相手にしている井ノ原、凌統は。

慶　「えぇ～い、まだだ～！！　召喚！」

土や岩でできた巨人が5体でてきた。

凌統　「遅いっつの。」

凌統が素早く5体の間をすり抜ける。そして慶の懐に飛び込んだ。

慶　「くそっ！」

慶が土のナイフを数十本放つ。が、それを凌統はすべて蹴り砕いた。
慶　（ん？・・・たく。澄嶺がやられたか。調子にのりすぎたな。ここはやはり・・・だが、逃げ切れるか？）
慶は岩石の巨人を2体召喚した。だが、さっきまでのとは少し違う。
凌統　「なんかひょろ長いのがでてきたね。」
そのとき、遠くから小さいが速さが並じゃない炎弾が5、6発飛んで来た。
慶　「！！・・・・・ねぇちゃんか・・・・。」
凌統　「準備ができたみたいだな。んじゃ、本腰入れてさっさと終わらせますか。」
慶　「全く・・・・付き合いきれるか！。」
岩石の巨人が２０体は召喚された。そいつらは一斉に凌統を襲う。
そいつらのさっきまでとは違うなにか、それは速さだった。さっきまでのとは倍は速い。
凌統　「速いねぇ。でも、速さだったら俺も負けてらんないんでね。」
凌統はそう言ったあと、突然速さがました。
身体強化は能力者の基本だが、ふつう部分的にはやらない。足技が主体の凌統のあみだした『脚力倍加』の力。また、その完成度も桁違いだった。

もとからの強化率が通常の並じゃなく、さらに本来ある足への負担もほぼないという究極的な完成度である。

凌統　「うっとおしいんだよ。」

巨人はすべて蹴り砕かれた。だが、そのころにはもう慶の姿はおろか、精神力の波長さえ感じなかった。

凌統　「逃げたか。まぁ、大丈夫だろ。」

井ノ原　「大宮からの連絡があったんだけど・・・・・なんだったっけ？」

キョウ維　「寮に敵が来たらしいから防衛に行ってほしいそうです。」

キョウ維が建物の屋上からおりてきた。

井ノ原　「え！？目前の敵は？」

凌統　「お、いつのまにか撤退してるよ。」

キョウ維　「既に陸遜殿たちは向っています。私たちも急ぎましょう。」

そして、中花街に残ったのは大宮と高本のみとなった。

大宮　「さぁて、そろそろ疲れたんじゃないかい？」

高本　「そういうお前もなかなか疲れが見えるが？」

大宮　「気のせいじゃないかい？」

高本　「かもなぁ！」
大宮はすぐさま白鷺を縦にふる。
黒い槍が2本落ちた。
大宮　「もう終わらせるか。『月光花』・・・・。」

大宮と高本を静寂が包んだ。
高本の前にはいつのまにか赤いひし形・・・・ダイヤのマークの壁が存在していた。
そのダイヤの壁は横に大きく亀裂がはしっている。

高本　「なるほど。刀の刃の表面に風をまとわせ、その風を刃とし飛ばす技ね。なかなか速いじゃないか。」

大宮　「スペードが攻撃なら、ダイヤは防御か。」

高本　「引き分けか。また会おうか。」

高本は去って行った。
大宮　「まったく、攻撃の2割ぐらい跳ね返されたか。しかもその2割を3倍にして・・・・・手強いなぁ。」

大宮服はの左肩から右脇腹にかけてうすく血がにじんでいた。

高本　「なにが『月光花』だ。いわゆるかまいたちみたいなものじゃないか。まぁ、技の速さはみとめるが。」
高本の服は左肩から右脇腹にかけて血がにじんでいた。

中花街の戦い
―異界歴元年―

大宮部隊の勝利。

第十四章　中花街の戦い　終結（後書き）

ながかった中花街の戦いも終結を迎えました。

ライバルを登場させました。やはりライバルは必要ですよね。

次は寮での戦いですね。御楽しみに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8749c/

能力者伝説 ～仲間探し編～

2010年10月21日21時51分発行